

# 道

(道といふ天道、神道、入道、地道、地下道、鋪裝道、砂利道、  
臣道、夫道、婦道、友道、東道、常識道等々種々に區別せらる  
るが、此「道」は其の中の數種の道につき何かの示唆を與へらる  
ことと思はるので掲載することとした。洩)

## 一、汽 車

河合惣太郎はアタフタと東京驛に駆けつけ大垣行の三等  
車に身を投じた。品川驛を過ぎた頃一小冊子を取り出し一  
讀しては瞑想し、瞑想しては一讀しつゝ辻堂驛を過ぎると  
急に目を窓外に轉じ、茅ヶ崎東海岸の方を凝視し、何とな  
く感慨に堪え難い様子であつた。それは親しかりし故香城

## 鏡 石 作

先生の別荘のある所であるからであらう。國府津驛につく  
と執海線の貫通するまでは此驛から松田、山北、駿河、御  
殿場などの諸驛を経て沼津に出たものだが、今から見ると  
随分時間も長くかゝつたことや、トンネルの敷を勘定した  
ことや、夏の旅などでは油煙で顔が黒くなつたことなど思  
ひ出して今昔の感に打たれたのであつた。鴨の官驛をすぎ  
たとき。突然トンキョウな聲で「此處は何處ですか」と二  
ツ前の座席から叫んだものがあつた。その向席に居る三十  
二三歳とおぼしき赤ン坊をおぶつた婦人が「お前さんあん  
まりよく眠つて居つたから起しもしなかつたが、次は小田  
原ですよ」と答へた。するとトンキョウ聲の男は「シマツ

夕。國府津で乗り換しなきや餘ッ程時間がおそくなる、これや困つた」と獨語してゐるうちに車は小田原驛に着いた。彼はソソクサと下車した、河合は此驛でも數年前東京から宇治山田までの國道即ち一號國道のバス旅行に参加した知人からもらつた「一號國道自動車旅行案内」(道路改良會編)を一讀して東海道の五大橋が架設せられたこと、其外名所舊蹟などのことに非常に興味を感じたこと、學生時代に石疊の舊道を登つたこと、足柄越とか箱根越とかいはれた昔時の業平朝臣の東下り其他の物語のことなどに想を馳せるのであつた。

根府川驛附近で山畑を眺むると黄金色の手毬のやうな密柑が累々として樹々に見られたので「てんでん手毬てん手毬てんでん手毬の手がそれてどこからどこまで飛んでつた……お籠は行きます東海道、東海道は松並木……」とよく唄つた今はなき女の兒を思ひ出してはいさゝか憂鬱そうであつた。隣席の中學生が「丹那トンネルは此處ぢやないか」といへば、他の中學生が「イヤ丹那ぢやない、丹那ト

ンネルはもつと長いぢやないか」「ウムそうか」と問答するうちに熱海驛についた。若干の客が乗り降りして間もなく汽車はトンネルにすべり込んだ。前の學生が「此處だ此處だ、之が丹那トンネルだ、長いトンネルだ」と大聲をあげたので思はず顔を見合して微笑するものもあつた。河合は丹那トンネル工事が豫想以上の難工事で、經費は倍加する、竣工はおくれる、工夫も何人か犠牲となつたことなど記憶を辿りながら、次のやうなことをノートブックに書くのであつた。

「世界の趨勢から觀察すると眞の平和が出現するのは前途遠くや。世界の騒亂は底止する所を知られない。今ぢや、何んとしても大政翼賛の精神を以て高度國防國家を建設しなくてはならん。夫れには是非とも最少限度に於て青森から福岡までの高速度自動車専用道路を築造することが第一の問題ぢや、そうなると差當り此箱根の山は天下の嶮函谷關ものならずと唄はれる此坂路をどうするか、小田原から仙石原を経て長尾峠を越え御殿場に出るコースを取

るか。夫れとも矢張東海道鐵道熱海線に並行して大隧道を開鑿し三島に出るか難問題である。夫れに全面的に考へると路線の撰定、路幅、勾配、路床、鋪裝、交叉設備等の技術方面の専門的研究は勿論、耕地關係、商工業關係、軍事關係等の政治的方面に於ても餘程入念に考慮するを要する。結局其の計畫は頗る深刻な問題ぢや、一體政治家は何を考へて居るであらうか……」

汽車は富士山麓のとある一驛についた。河合は徐ろに下車し驛外に出て、白扇さかさまにかゝる東海の天と詠ぜられた富士の麗峯を右手に仰ぎながら、トラツクや荷馬車の爲めに無慘に路面を打ち壊はされて居る砂利道を辿るのであつた。

## 二、訪 問

町はづれのさゝやかな雜貨店の前に來ると河合は其店前に立ち

河合「美知子さんおいでですか」

とおとなつた。すると奥の方から「ハイ」と答へながら二十七八歳の婦人がエプロン姿で出て來て

「アラ先生どうしませう、お手紙も差上げませんのに、よくマア……今日は朝から急用が出來まして歸國へ参り只今歸りました所です……折悪しく今晚も會がありません……」

河合「そうですか、美知子さんも御變りなくて……お母さんはまだお歸りになりませんか……それぢやお母さんの御歸りを此處でお待ちませう」

美知子「マア御上りになつて、どうぞ」

河合は靴を脱いで座敷に上り、さしだされた座蒲團にあぐらをかいた。

河合「僕におかまいたく美知子さん御仕度を……」

臺所の方から

美知子「でも御茶でも、お菓子も何も御茶受けが御座いません」

河合「イヤ結構です、お茶もいりませんから、どうぞはや

くお仕度を……」

美知子はやがて茶器を運んで来て茶をさしながら

「先生何んとも申譯が御座いませぬ、今晩の會のことも申し上げませんでしたから……ホントウに餘儀ない會なので……おせわしいのに、こんな田舎へまでお出下さつたのに妾困りましたわ……」

と言ひながら、深く考へ込んでおつたが

美知子「今晩の會は妾よしませう、先生に申譯が御座いませぬから思ひ切つてよします」

河合「それぢや僕が美知子さんに申譯がないから、これから熱海へでも寄つて東京へ歸りませう、お母さんによるしく」

と彼はカバンに手をかけた。美知子は當惑した表情をして河合をジーツと視つめて居つたが

美知子「それぢや會に参ります。先生には濟みませんが参ります……母がぢき歸りませうから……」

彼女は俄かに外出の仕度を始めたが河合はなほもせきたて

た。

美知子「いつて参ります」

と手をついて挨拶した。

河合「よろしい、留守はしますから。御ゆつくり……」

彼女は店を出て夕闇の裡に其の姿を消した。

河合は柱にもたれて暫らく瞑想しておつたが「ごめん下さい、バットを一つ」と店の方で聲がしたので、彼はソツクサと店に行きバットを一個取り出して「どうも難有」といつた。職工姿の客は不審そうに河合を見ておつたがヒョツコリ頭を下げて「どうも濟みませぬ」と代金を拂つて店を出た。河合が元の座に歸るとまた煙草を一つといふ客が來た。次から次へとバットを下さい、洗濯シャボンを下さい、洗粉を下さい、電球を下さいと續々と客が來る。夕暮の店の中々せわしないが聊か興味を感じたと見へ、河合はニコ／＼顔して禮を云ひながら品物を渡し代金を受取る。年増女がはぎをといふ、そのおき場所が判らないので河合が其處此處見まわしておるとその女客が「その上の棚にあ

ります」と教へてくれたのでそれを取り出して渡した「お代をおきます、どうも済みません」といつて店を出ていつた。萩の代金が幾何か知らない河合は不安そうに代金を手にしてあたりを見まわすと、壁に煙草の値段表が張つてある。夫れを見て安心して元の火鉢の側に戻つた、が火はそろ／＼消えかゝつて来た、木炭の置き處が判らないので其の儘にして置く。やゝ客がとぎれたと思ふと店の方から座敷にあがつて来る足音が聞へたので其の方に目を向けると母親「マア先生でしたか。どなたかと思ひました、美知子はいませんか。先生をお獨りおいて……」

河合「イヤ突然伺つて失禮しております。美知子さんは餘儀ない會があるといつて今し方御出掛けになりました。

僕がお留守をしてあげるといつて貴方のお歸りをお待ちして居ります、どうもその後は……」

母親「イーエ、こちらこそ、御無沙汰いたしましたして申譯が御座いません。こちらの都合で何にかとお願ひばかりいたしましたして……」

河合「月日のたつのは早いものですね、善一君が戦死されてもう一年半になりますね、美知子さんはお元氣で結構です、久美子さんは其後如何ですか……」

母親「ハイ、御蔭様で久美子は新家庭をつくりまして幸福な暮らしをしておりますが、主人が何分忙がしいので近い處ですけど此家へはめつたに参りません……先生こんな御心遣をなさつては恐れ入ります、それでは久美子の方へ御届けいたします」

と河合が手渡す新聞包を受取りながら

母親「先生何んとも申譯が御座いせんが、實は私急用が出来まして二里程さきの弟の宅へ参らなければなりません、今すぐ驛前からバスが出ますので急ぎますから……」  
羽織と足袋を箆筒から取り出して

母親「今夜はお泊り下さいませ、美知子をお預けいたします、先生には御迷惑でせうが、私はあれでも獨りおいとくのを心配しておりますが、先生がお泊り下されば安心して行かれます、明朝は六時までには歸りますから何分

御頼み申します」

といふて急いで出ていつた。

「またしても四、五人の客が煙草を買ひに來た、やゝ馴れたのでどうも難有との口調も板についたなと河合は獨言をいつた。臺所の方でガタコトと戸をあける音がしたので急いで行つて見ると「奥様からの御注文でした」と出前持が壽司の大皿をおいて歸つた。

靜かになつたので河合は讀みかけの福島牧師の贖罪論を取り出し頁を繰りはじめると「ごめんバツトを一つ」と客が來た。續いて五、六人來たので店にあつた煙草は賣り盡した、これからの客にどう斷らうかと思つたが、馴みの客ばかりと見へ外から空の容器をながめては歸り行くのでやつと安心した。靜かにはなる。寒さは加はる、外套で膝を巻いて足をあたゝめながら讀み始めた、もう十時が近い。

店先から

美知子「先生ごめんなさい、大變遅くなりました、御母さ

んね……」

河合「急用が出來たとのことで叔父さんの所へバスで行かれました、貴方を僕に預けるといわれてね……僕お母さんの様に信用されると甚だ恐縮する」

美知子「そりや當然ですわ、先生を誰が疑ひますか妾でもよ」

と笑顔でいつた。

河合「イヤ、どうも閉口する、串戯の一言もいわれないからね」

美知子「まさか……お壽司はまだ参りませんの」

河合「ア、机の上においてあります」

美知子「先生に差上げようと思ひまして……なぜお召し上りになりませんの、おきらい……そう、では妾もお相伴いたします」

彼はするうちに時計は遠慮なく進んで十一時を報じた。

美知子は隣室から寝具を取り出しながら

美知子「お寢巻は善一のお短衣から御寒いでせうね」

河合「イヤ、カバンに入れています、ではお先に、美知

子さんも早くおやすみなさい、洗ひ物は朝にして……」  
やがて河合は寢床の中に身を入れたが、何んとなう眠れないで輾轉反側した。美知子も眠れないと見へ時々吐息をついたり、ぬがへりを打つのであつたが何時しか静かになつた。河合は「とうとう眠られたナ、若い未亡人といふ境遇は不憫至極だ、處女の如くに將來の希望に生きる快活さはなく、人妻の如く夫に依存し満足する現實感を押し擴げる度胸もなく、どんなに親しみをもつ者からでも充たされ得ない、またやるせない、所詮どうすることも出来な空虚が何處かにあつて、焦燥と煩悶の感覺を強く動かすのであらう。であるから特に戦死者の未亡人にはもつと深い理解をもち、世の誘惑と壓迫とに對し保護を加へ援助をせねばならん」と歎息した。そのうち木枯吹きすさぶ雨の夜の更け行く裡に彼もうと／＼と眠についた。

### 三、因縁

七、八年程前である。美知子は東京の蓮見といふ實業家

の家庭に身を寄せておつた。或る機會から河合と知り合つて月日を重ねるうちに、美知子は父が事業の失敗から母に二人の女兒と家、屋敷と少し計りの田地とを興へて横濱に行き、其の儘今日になつて居る家庭の事情や身の振り方や將來の生活の事など何くれとなく打ちあけて父の如くに、また兄の如くに相談するに至つた。河合も氣の毒な家庭の事情、處女の獨り惱む人生觀に同情し、兄の如く教師の如く良い友でもあるといつたやうな心構で相談相手となり、指導者となり、保護者となり、遂に同じ信仰の途に美知子を導いたのである。

或る時美知子は河合に打萎れながら

美知子「先生大變にお世話になりました、御恩返しもせず國へ歸らなければならなくなりました、歸りますれば何時またお目もじが出来ますことやら御名残り惜しうは存じます……もしかするとまた上京するかも知れませんが……」  
妾はどうでもして上京したいと存じます……」

と告げた。

河合「驚きましたね、夫れはどういふ譯ですか、餘り突然ですネ、御結婚でも……」

美知子「エー、そうですよ、何んといつても母が聞き入れません、相手は軍人ですけど……妾は獨身で行く積です、が母が大變に其人を信じておられますので……」

河合「美知子さんよく御考へなさい、若い時はとかく獨身などと決心しておつても、それは人間の本性ではないのですから、餘り理想に重きを置きすぎて現實に即しない考方をする、不幸な生涯を辿らねばならなくなる、ことが多いのです、お歸りになつて御母さんや叔父さんなどに卒直に貴方の考を御話しになり、又御母さんのお考も十分にお聞きになつていやが上にもよく熟考なさつて決心なさい、もしか一人で思案に餘つたら手紙でも……」

場合によつては僕が出掛けていてもよいのです」

夫れから數日後のことである、美知子は住みなれた東京を後に富士の麓のある町へ歸つた。

一月程経て河合の許に美知子から手紙で、何んと反對し

ても母が許してくれないから、無理でも上京しますといつて來たので、河合は取り敢えず田舎の家に美知子を訪ねた。

美知子は妹の久美子（久美子）と二人で裁縫をしておつたが、妹を近くの親戚へ使に出して結婚の事で河合と數時間語り合つた。

河合「それぢや僕は卒直にお尋ねしますが、貴方は外に想思の男性がありますか、若し夫れがあれば僕もよく詮議した上でお母さんの方を斷るやうに骨を折つて其の方へ力を入れませう、腹藏なく打ち明けて下さい」

美知子「イーエ、決してその様なことは夢にも御座いませぬが、どう考へても母の信ずる方とは……」

河合「そりや大變な考へ違ひと思ひます、貴方の幸福を望めばこそ親心として自分の信ずる男を貴方の夫として將來に望を置いてのことです、僕は貴方の爲めに考へるとお母さんの御意見に従ふことが親孝行といふもの、それが子として歩むべき正しき道であります、僕は貴方の考



へ方には賛成が出来ません」

美知子「先生までがそういふお考へなら妾は母の意に従ひ

ます……」

美知子は遂に結婚した。

月日は流れて二月を経た河合は美知子から次のやうな意味の手紙を受取つた。

「意外にも夫善一の人格は立派で妾の將來は幸福と存じますが、善一が十三歳の時、妹が生れた直後母は産褥熱で死にました、父は他家へ行つて歸りません、それで善一は赤ん坊の妹と共に親戚に引き取られ、小學校から歸ると妹の守をするといつたやうなことで、どこまでも素直に、親切に、純真な性質をもつて成長しました、今軍隊に在りましては上官から愛せられ、部下の兵からは親しまれております、先生御喜び下さい、妾はこんな夫をもつ境遇におかれて居ります」

此手紙を一讀した河合は、我が子の身の上の如くに喜んですぐ手紙を以て尙も獎勵を加へたのである。

結婚後夫に従つて母と別居したが。三月程で善一は出征

したので美知子は母の許に歸つた。善一は吳淞鎮に敵前上陸して第一線に忠勇なる准尉として各地に活躍したが、不幸にも負傷して上海の療養所に後送せられた。此通知を受けた美知子は心も狂せんばかりに大きな衝動を受けたが、夫と一心になつて報國の誠を盡さんものと意を決して陸軍病院に志願し看護婦となつて、傷病兵の看護に従ひ日夜心骨を碎いて一生懸命に其の職に盡した、患者は女神の如く慕ひ、院長其の他から篤く信用せられたのであつたが、善一は全快して原隊に復し再び戦線に立つこととなつた、美知子もある事情の爲めに病院を退き母の許に歸つた。

翌年の五月十一日である、善一は河南省月河鎮の敵堅陣攻撃の際一小隊長として突撃指揮に當り。不幸敵の飛弾のため名譽の華と散つた。美知子は今年の秋には凱旋の將校として歸還するものと思ひ込み、其の日を待ちに待つて居つたので、此悲報に接して失望落膽、夫の後を追ふて……とまで哀愁の極に達し、他人の慰藉の言葉に耳をかすの餘裕

もなかつた。しかし意志の固い、理性の強い、勝ち氣な氣質は一時の昂奮から醒めると自分も軍人の妻である、夫に殉死する覺悟でお國の爲に奉公しなければならぬとの決心をなし、間もなく前に勤めた病院長に惻願して地方の陸軍病院に再び看護婦として傷病將兵の爲めに心根を盡して勤むることとなつた。地方の新聞は白衣の未亡人として寫眞までかゝげて褒め立てたのである。院長初め上官達からは非常に信用せられた。それかあらぬか荆棘の途は其處にもまた彼女の前に横はつておつた、新採用者として日夜過重な責任は負はされ、更らでだに夫の戦死に依つて回復し難い精神上に大なる傷を受けておる身のこととて次第に疲勞を覚え、遂に甚しく健康を害したので心ならずも退職して家に歸つた。生きて行かんとする強さは體の回復を俟たず、他に職業を興んで雌々しくも生活戦線に立たんものと心を勞したが、軍部の方の援助もあり、さゝやかながら雜貨店を開いた。新開地特に工場が次ぎ次ぎに建築され次第に廣がり行く街路の衝に當つて居るので、意外にも品物は捌ける

其の内でも煙草は配給量では應じ切れない程の賣れ行きでもかく日々の生活上の安心は得られたが、美知子の身に取つて耐え難い苦悶を感じる問題は善一の金鶏勳章年金、一時賜金、扶助料等の収入の處分である。二十餘年前から家には居らない善一の父から子のないのを理由に美知子の實家への復歸を要求し來り、若しそれを承諾しなければ同居せよ、之れにも應じなければ戸主權を以て離籍するとの申込みであつた。此は世間にも往々見らるゝ戦死者遺族間の醜き葛藤で而かも父の側には相當有力な後押しもあり、種々込み入つた事情もあるので、ヒシ／＼と迫り來る此難問題について相談相手の少ない身に取りては容易ならぬ苦痛である。それに善一に對する切々たる思慕の情は中々解決の途を見出されないのである。それでゐて彌縫的な糊塗的な工作では中々承諾を與へなかつた。河合は此事情を知ると忽ち義憤心を起し諸方面に奔走する所もあつたが、軍部の方々の殊の外なる同情と援助とに依つて幾多の迂餘曲折を経て漸く美知子が分家することとなつて、其の葛藤

事件は圓滿に一應の解決を告げ、善一の遺骨は分骨して美知子は某地最高指揮官であられたM將軍の揮毫を乞ひ受け見事なる墓碑を建立した。残る問題は親戚達の奨めに従つて再婚するか否やのことである、求婚者は現に三、四人もあるが、それ等の人々が何を美知子の身に狙らつて居るのであろうか、美知子の心情をよく理解してゐる河合に取つては一の大きな苦勞の種である。七、八年前に二人の間を結び付けた奇しき因縁の紐は時の流と共に縷々として絶たれそうでは絶たれず、美知子の身に何か事が起るとまたも固く結ばれて行くが、若し美知子が再婚すれば其の紐はブツツリ断ち切られるではなからうかと淋しいはかない思ひをしないでもないが、何はともあれ美知子の將來を如何に幸福にすべきかと苦心しつゝあるのが河合惣太郎である。

#### 四、歸 京

フト目をさまして腕時計を見た河合は、美知子が今朝早く静岡に行かなければならないことを知つてゐるので

河合「美知子さん五時ですよ、起きなさい、お母さんとも歸られますよ」

美知子「ハイ、でもまだ少し眠う御座いますわ」

といひながら起き出て寢具を片づけながら

美知子「先生それだけのお蒲團で御寒くは御座いませんでしたか」

河合「イヤ、有難う、寒い所か、とても暖かつた、一昨年の夏泊りましたね、あの夜僕が便所に行くので貴方の室を通つた時、お母さんと貴方との間に空の寢床が取つて善一君の枕までチャーンと置いてあつたのを見た僕は善一君に對する貴方の愛情のこまやかで、そのしほらしい胸中をお察して思はず涙を流したことでした、此蒲團も善一君凱旋の日の準備のため熱情を込めて作られたものでせう、僕までが其の熱情の迸りにふれた譯ですから寒さを感じるなどのことはありませんでした」

美知子はガバとばかりすわつてむせび泣くのである。河合は言ひ過ぎたなと氣がつき

河合「美知子さんどうもすみません、また貴方を泣かしましたネ、おゆるし下さい、僕罪なことを言ひました、わるかつたのです、泣くのはよして下さい」

美知子「イ、エ、先生がおわるいなんといふことは少しも御座いません、唯思ひ出しては泣かすにおられません、お耻しいとは思ひますが、先生の前ではツイ我儘が出まして……」

思ひ返してか美知子は涙をふき寢具を押入におさめた所へ母親が歸つて来て

母親「どうも遅くなりました……昨夜の雨で道がすつかりぬかるみとなつて、急いでも中々抄取りませんで……それでも四時頃から歩きましてやつと今頃つきました、もう六時をすぎましたね、これからすぐ職場へ参らなければなりませんから、先生どうぞ御ゆつくりお休みなさつて……美知子が留守になりましたら久美子の宅で……」

河合「どうも有難う、御疲れでしたらう、お達者ですね、二里餘りの道をお歩きになつて、而も雨後の田舎道を……」

……少しもお休みの間もなくすぐまたお出掛けですか、どうぞお大事に」

母親「何のおかまいも出来ませんがいたつて静かな所で……御休息の爲めに何時でも御都合がおつきでしたら、三晩でも四晩でもお心おきなく……では失禮いたします、美知子さん先生に御飯をお早くにネ」

やがて河合は美知子と共に軽い食事をすませて

河合「美知子さん、いそいそでお仕度をしなければ時間がありませんよ、お茶碗なんか御歸りになつて洗ひなさい」

美知子「アラ大變だわ」

と腕時計を見ながら、取りいそいで化粧や身仕度をととのへ、店を戸ざし、留守を隣に頼み、足を早やめてステーションに向つた。

雨の後の田舎道は堀り返へされたやうになつて、泥は靴のかかとを埋める程である、美知子は足袋をぬいて手にし河合にせかれながら歩いた。

河合「こりやひどい道ぢや、しかし東京でも銀座の真ん中

を鐵道馬車が通つておつた時代は、とても悪い道であつた、すつと後でしたがアメリカのヒルと云ふ人が雨の日の銀座は舟でなければ通られない、日比谷の交叉點あたりでは肥料がなくても良い米がとれると皮肉な言をいつたといふ程であつた、今では鋪裝が行き届いて來たから大概の雨では平氣で行かれる、此處の道は田舟にでも乗らなげりや何時驛に行かれるか判らないネ……美知子さんお母さんは全く強い足だね」

河合の足取りがはやいので息をはづませながら

美知子「先生のおつしやる通りですの、妾東京から歸りました當時は随分雨の日は困りましたが、今では馴れましてそれ程にも思ひません、田舎でも鋪裝は是非早く願ひたいもので御座います」

河合は一步先きに驛についた、發車時刻三分前である。

ア、ヤツト間にあつたといふ氣持ちをしながら、靜岡行き

の切符を求め後からかけつけた美知子の手に渡しながら  
相見てはまた相見んと言もなく分れに握る友の手を見る

と小聲でいつた。腫をうるませながら、

美知子「どうもすみません、では……」

といそいで改札口を出でプラットホームから河合を見返り  
美知子「先生どうも有難う存じました、お見送りする身の

却つてお見送りに預りましたは何とも申譯がございませ  
ん、夫れでは御機嫌よう」

河合「それでは……はやくお乗りなさい、汽車が出来ますよ」  
美知子「大丈夫ですわ、では左様なら」

といひつゝ汽車に乗り込んだ、顔はほのかに車窓にうつつて居る、汽車は動き出した、機關車から吐き出す黒煙は風の爲に低う流れて車窓を掩ふた、河合はやゝしばらく見送つておつたがやがて東京行の車に身を投じた。驛を離れると車窓から木枯にふきぬぐわれた冬の青空と旭の片照りする山々を見上げ見おろしておつたがツト手帳を出して

振り返り振り返り見れば雲湧きて

遠ざかり行く曉のふじ

と鉛筆を走らした。

奥武藏吟行

田中野狐禪

山なみと山なみと霧を隔てけり  
 羽づくろひす鷹にやあらむ冬の雲  
 八大龍王の祠に登り盡きぬ風を寒み  
 冬の山三角點を抱えけり  
 一木一石皆からびぬつ山の冬  
 葉漏れ陽や照り葉照り葉の藪柑子  
 タンク包む鑛泉宿ぞ冬構  
 陽全たし枯木の奥の菜畑かな  
 寒林や松黒々と向ふ山  
 冬の蠅動かであるや陽の疊  
 小春欄に乾ける彩よ繪手拭  
 陽を蔽ふ雲の動きや冬木宿  
 櫟落葉を踏み込りけり濕地面  
 冬霞む武野の果なる筑波山  
 山芋の苞家つどや捧げ持つ  
 停車場を我も吐き出て暮れ寒し

答なき門にゆれるぬ花八ツ手

借水

團欒の視線を集む炭火かな

同

炭の香の窓邊に近く頁繰る

文女

髪濯ぐ湯の冷え早く冬日かな

同

停電の闇に炭火のうつくしき

苔石

冬木立没日の空にうすれゆく

同

風破れて枝にかゝれり冬木立

臺蛙

寒天や炭火かゝえし渡守

同

奈良東大寺のぼとり

冬の道鐘の餘音を歩々敷ふ

麓丘